

修験道を中心とした学祖の学理思想

中山 清田

一 井上円了の学理思想の基礎となった東西思想

学祖井上円了（以下円了と呼ぶ）が一八八四年に三宅雄二郎らと共に、東京大学内での「不思議研究会」において妖怪研究を始めるわずか二年前、一八八二年にイギリスで心理学の知識では、理解するのできない心理的現象を研究する超心理学の一つである心霊研究の、協会が設立されている。

『呪術』¹⁾に円了とほぼ同時代、ヨーロッパ十九世紀における呪術と科学について紹介しているのを記するとしばしば、呪術は十九世紀末に科学的段階に入ったというようなことを聞く。ある人々にとっては、これは科学によって呪術が無意味なものであることが証明されたということを意味する。（たとえば人体輻射の実験的発見はある種の伝統的作の現実的効力を示すものであると考える）。しかしよく了解しておかなければならぬことは、科学には呪術を否認したり確認したりする権利はないということである（「科学と呪術」の章を参照）。

科学にできることは、知られざる実証的媒体を発見することである。そして、この意味において、科学は事実において欲求の創造的な力―これが呪術的精神の本質的なものであるが―にたいする信頼の念を強めるものではなく、むしろ弱めるものである、と我々には考えられる。

円了は一八八八（明治二十一年）年に、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、オーストリア、イタリア、エジプト、イエメンを欧米の政教関係、東洋学の研究状況の視察目的として、一年間外遊しており当然科学と呪術の関係は熟知しており、その後一八九六（明治二十九年）年に妖怪学講義を哲学館より出版している。

「呪術」を主としていたのが修験道である。「当山修験深秘行法符呪集」には四四〇余の諸法が収められている。修験道は呪術によって治療行為を中心とするもの、悪魔をはらうもの、農作物の五穀豊穰、長命を祈るものというように民家の幸福を願うものばかりでなく、呪うという諸法も収められている。

呪いには非常に古くより行なわれていたらしく、奈良時代に行なわれていた例として、平城京の大膳職の井戸のあとより発見された人形には、両目と、胸に釘穴が残ってあった呪詛人形が有名であるが、現代でも夏になると決まって、テレビ等で取りあげられている。

「呪術」は、修験道消滅の理由の一つとしてあげられている。修験道は、明治維新の神仏分離令で、修験者は天台宗、真言宗の僧侶になるか、神宮、農家になるかという事で、完全に新政府により消滅させられている。

修験道は、鳥居をたて水垢離をとり、修祓を行うなど、神祇信仰の要素は至る所にみられるのみならず、祭礼行儀には、方位を重んじ、反問をふむ類の鎮魂的動作、呪術的所作を中心として、陰陽道の要素の混入されているので宗教でないと「呪術」は修験道廃止になった大きな一つの要因にされてしまわれたのである。

ヨーロッパでキリスト教の「呪術」は科学的段階に入り科学で「呪術」を解明しようとしていた時代である。

円了は、当然ヨーロッパの書籍等でヨーロッパの「呪術」に対する思想は十分に知っていたはずである。

日本国内に於いては、排仏毀釈でみられるように宗教界より「呪術」は否定された。⁽³⁾『新仏教論』で円了は、その主旨を宗教と知識とのかかわり、道理上の宗教としての仏教、宗教の改良維持である、真の宗教は「智力上の宗教」であり、合理主義に合致しない「感覺的宗教」を迷信として真の宗教ではないとしている。仏教教理を哲学や科学で真理を明確にすることにより、「真の迷信」とは何かという事を明らかにしようとしたと思われる。

円了は、明治維新の十年前に、新潟県三島郡越路町にある真宗大谷派慈光寺住職を継ぐ長男として生まれているが十年後に明治新政府は、神道国教化政策をとり修験道は取り潰されている。

当時の世相を反映した狂歌に「要らぬもの弓矢大小茶器の類 坊主山伏さてはお役者」と歌われるほどであった。⁽⁴⁾その「山伏」修験道が最も多く扱われているのが、『妖怪学講義』である。『妖怪学講義』には修験道の教理的な事は紹介されずに、事相的な「呪術」のみが数多く取り上げられている。修験道の教理的な面は「智力上の宗教」であり、「呪術」は「感覺的宗教」として「真の迷信」としたと思われる。

本論は、『妖怪学講義』（講義録、合本六冊）一八九六（明治二十九）年 円了三十八歳 哲学館発行 を中心に論を進める。

二 井上円了の学理思想の体系と特徴

明治新政府より廃止された修験道の「呪術」の儀礼を円了は『妖怪学講義』の中で数多く取り上げられている。目次で列挙すれば

第一類 総論

第一篇 定義 第二篇 学科 第三篇 関係 第四篇 種類 第五篇 歴史 第六篇 原因 第七篇 説明

第二類 理学部門

第一種 (天象篇) 天変、日月、蝕、異星、流星、日暈、虹蜺、風雨、霜雪、雷電、天鼓、天火、蟹氣楼、龍卷
第二種 (地理篇) 地妖、地震、地陷、山崩、自倒、地雷、自鳴、潮汐、津浪、須彌山、龍宮、仙境、
第三種 (草木篇) 奇草、異穀、異木
第四種 (鳥犬篇) 妖鳥、怪獸、魚蟲、火鳥、雷獸、老狐、九尾狐、白狐、古狸、腹鼓、妖獺、猫叉、天狗
第五種 (異人篇) 異人、山男、山女、山姥、雪女、仙人、天人
第六種 (怪火篇) 怪火、鬼火、龍火、狐火、虫、火車、火柱、龍燈、聖燈、天燈
第七種 (異物篇) 異物、化石、雷斧、天降、異物、月桂、舍利
第八種 (変事篇) 变化、恙虫、カマイタチ、河童、釜鳴、七不思議

第三類 医学部門

第一種 (人体篇) 人体の奇形変態死体の衄血、死体強直、ミイラ
第二種 (疾病篇) 疫、痘、瘧、卒中、失神、癲癇、諸狂 (躁性狂、鬱性狂、妄想狂、時発狂、ヘステリー 狂等) 髪切病

第三種 (療法篇) 仙術、不死薬、鍊金術、御水、諸毒、妙薬、秘方、食合、マジナヒ療法、信仰療法

第四類 純正哲学部門

第一種（偶合篇）前兆、前知、予言、察知、暗合、偶虫

第二種（陰陽篇）河圖、洛書、陰陽、八卦、五行、生剋、十幹、十二枝、二十八宿

第三種（占考篇）天氣予知法、運氣考、占星術、祥瑞、鴉鳴、犬鳴

第四種（卜筮篇）易筮、龜卜、錢卜、歌卜、太占、口占、辻占、兆占、夢占、御籤、神籤

第五種（鑒術篇）九星、天元、淘宮、幹枝術、方位、本命的殺、入門遁甲

第六種（相法篇）人相、骨相、手相、音墨色、相字法、家相、地相、風水

第七種（曆日篇）歲德、金神、八將神、鬼門、月建、土公、天一天上、七曜、九曜、六曜、十二運

第八種（吉凶篇）厄年、厄日、吉日、凶日、願成就日、不成就日、有卦無卦、知死期緣起、御幣カツギ

第五類 心理学部門

第一種（心象篇）幻覺、妄想、迷見、謬論、精神作用

第二種（夢想篇）夢、奇夢、夢告、夢合、眠行、魔

第三種（憑附篇）狐憑、人狐、式神、狐遺、飯綱、オサキ、犬神、狸憑、蛇持、人憑、神憑、魔憑、天狗憑

第四種（心術篇）動物電気、コックリ、棒奇、自眠術、催眠術、察心術、降神術、巫覡、神女

第六類 宗教学部門

第一種（幽霊篇）幽霊、生霊、死霊、人魂、魂魄、遊魂

第二種（鬼神篇）鬼神、魍魎、罔兩、妖神、惡魔、七福神、貧乏神

第三種（冥界篇）前生、死後、六道、再生、天堂、地獄

第四種（触穢篇）崇、障、惱、忌諱、触穢、厄落、厄拂、驅穢、祓除

第五種（呪願篇）祭礼、鎮魂、淫祀、祈禱、御守、御札、加持、ノリキ、禁厭、呪言、呪咀、修法

第六種（靈驗篇）靈驗、感応、冥罰、業感、応報、託宣、神告、神通、感通、天啓

第七類 教育学部門

第一種（智徳篇）遺伝、白痴、神童、偉人、盲啞、盜心、自殺、惡徒

第二種（教養篇）胎教、育兒法、暗記法、記憶術

第八類 雑部門

第一種（怪事篇）妖怪宅地、枕返、怪事、

第二種（怪物篇）化物、舟幽霊、通り惡魔、轆轤首、

第三種（妖術篇）火渡、不動金縛、魔法、幻術、糸引

理学部門で特に、修験道に関しては、九尾狐、白狐、天狗、釜鳴等が記されている。理学部門の結論として物理的妖怪は以上講述せし所の外に、我邦諸方に伝ふる所幾種なるかを知らず、其書に書き載せられ又口碑に伝はれるもの、到る処として之を見聞せざるはなし、然れども此等は未だ理学の開けざる当時でありて、妖怪不思議となしたるもののみ、今日より見るときは一として不思議となすに足らざるなり、然り而して今日の理学も固より其進歩の高点に達したるにあらざれば、物理的妖怪にして或は未だ明かならざるものなしとせず、故に余は変式的理学を起して、専ら物理に属する妖怪を説明せんことを望むものなり、されど余はもと理学を専門とせしものにあらずれば、其道理に暗くして一々之か説明を下すこと能はず、故に変式的理学の研究は専門の士に譲りて、誰余は其研究の端緒を開かんと欲し、物理的妖怪中の一部分を掲げて之に多少の説明を与へ

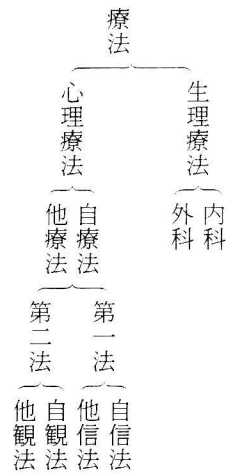
たるのみ、今以上述べたる妖怪の種類を概括するに左表の如し、



此等の妖怪は皆実に物理的なれども、世間、無智迷信者の多きより、之に幻覚妄覚を加へて心理的妖怪を混入するもの少なからず、されども此心理的部分は心理学部門に譲りて此に論せざるなり、とある。

釜鳴は蒸気の力により鳴り吉凶を占うのであるから、物理的妖怪の無機的、物理的の種類に入るといふ分類法である。

医学部門では、治療法を次の様な表にして示している。



心理療法は催眠術療法という名称であり、心理療法は人の精神作用によるものであるから、「人の信仰」が源であるとし、「呪いと心理療法について」円了は

例へは人をして其病の必ず平癒するを信せしむれば精神作用の妨碍を除きて其本に復する自然の性を養成するを以て治し難き病も治することを得へし、然るに此信仰によりて疾を治する法は古来其例に乏しからず、彼の神仏を念し祈禱を行うて治療を施す者皆此類なり、先の所謂御礼「マジナヒ」の功驗あるは亦皆同一理なり、且つ古代医学の未だ発達せざるに当ては世間の療法は唯此信仰作用によりしこと明かなり、今日は生理学病理学等ありて信仰を離れて治療を施すに至りたれとも、尚ほ名家の療法は信仰によりて治するを免れず、己に信仰の療法に欠くへからざること明なれば其理を研究すること亦必要なり、而して其理は心理学の今日己に攻究する所にして此学について考ふるときは信仰の果して治療に実益ある所以も明らかに知ることを得へし……略

として、現代精神医学で用いられている心理学的治療と立場が異なっていないと考えられる。当時の世相での要らぬものにある坊主山伏という風潮で「信仰」を治療に加わえるという事は、かなりの勇氣が必要としたと考えられる。

三 井上円了の学理思想の同時代的今日的評価

修驗道の儀礼の呪いが多く取り上げられている。第四類 純正哲学部門の結論として次のように記されている。第六十四節（結論）以上数講数十節に分ちて講じ来りし所のもの之れを概括するに、吉凶禍福を人力によりて判断することは全く不道理の妄説なりというに帰す、而して世人の之を信するものあるは、智識の程度の甚た低きを以て自ら起す所の迷誤たるに過ぎず仮令物理的説明に照して多少の道理ありとするも、それは極めて小部分のことにして、之を職業とする卜筮家相法家も、又其説を迷信するものも、全く迷雲の間に彷徨して帰宿する所を知らずと謂うべし、又心理上の説明より見るときは幾分の道理ありと雖も、其の道理たるや人の迷誤によりてかかる結果を来すべしといふに過ぎざれば、物理上よりいふも心理上よりいふも心理上よりいふも、唯一の迷誤たるに過ぎざるは明なり、然らば今日より之を処する方法は如何にすべきといふに、一切此の如き鑑術、相法を廃絶するか、然らざれば其中より不道理的の部分を除き去りて、之に代ふるに学術的方法を以てすることは是なり、それは第六講相法篇に於て論じたるが如く、相法の類は、る道理あるものなれども、今日は之に多少の不道理なる元素を混合して世に行はるるか故に、今後新相法を興して学術的に考定し、以て今日の害を去り迷誤を除かば、亦多少世を益することを得べし、然れとも之に関する万全の策は、世人をして其の身

に道德を行はしめ人に対して恥ぢず天に対して恐れず、其心中実に青天白日にして一点の曇りなき身とならば、時日の吉凶善悪は如何、方位將た天運の如何は毫も念頭にかくることなく泰然其の心に満足して以て其の本分を全うし、其の生涯を送ることを得べき理を知らしむるを第一とす、斯くして人をして尽く道德界中の一人たらしむすを得ば、これ実に人を迷誤の泥中より救ひ出すの最上策なり、尚書に語あり曰く、鬼神無常饗饗于克誠と、左伝に曰く、鬼神非人実親惟德惟依と、或は我邦の歌に、誠の心に神宿るとも、して其の心に危懼する所なくんば、天下一物も恐るべきものなく、此の世界其りにて実に天堂樂園或は黄金世界となるべし、然るに唯余が恐るる所は今日の人をして、く聖人君子となさしむること能はざるを、是を以て余は今日の不道理的卜筮鑑定相法等に代ふるに道理的方法を以てし、既に第一節に述べたる哲学的卜筮、學術的相法を考定して世間に発表するの意なりしも、之を考定する迄に数回の試験を行ふを要するを以て、其結果を公にするは他日を待たさるべからず、故に今回の純正哲学の講義は此に結了を告ぐるなり、言者請ふ之を諒せよ

哲学に「純正」という言葉をつけた意味はメタフィジックスで形而上学と取ることが出来る。部類の方法も、東京大学の学科編成が変化している点と以ている。西義雄博士が東京大学に入学される少し前までは、哲学科の中に宗教学、心理学、論理学、印度哲学、と独立していたが、学問を広く捕まえて、理学、医学、心理学、宗教学、教育学と分類し残った学問を円了のカテゴリーの中では処理出来純正哲学とし、妖怪学としたのではと考える事が出来る。

第八類 雑部門にも修験道の儀礼に入っている。火渡、不動金縛等が入っているが、例えば、火渡のように、理学部門、心理学部門と宗教学部門に複合しているような部門を入れていると考えられる。

恩田彰教授のご指摘にもあるが、超心理学は百数十年の歴史を持ち科学的な研究が、かなり進み、現代では、円

了の考えはかなり古い面がある。心霊現象、迷信を断め切っていく立場での円了を今現在見ると、非常に無理な切り方がある。しかし、その当時の知識ではやむ得ない面があり、何にでも割り切れるところに一つの啓蒙主義の立場が若干あると思われる。しかし、円了は解からないものは解からないとして、妖怪として残したことが実にすばらしい事である。特に最近では、心身問題と「心」と「物質」との関係が非常に大きな問題になってきているが、こういう面は先端の問題であり、今の科学の第一線をもってしても究明できないものがある。円了が称する妖怪に近いものがある。この事は円了の業績として非常に重要と思われる。また、日本での超心理学の開拓者的存在である。

純正哲学部門での人相、骨相、手相などの相法占いは、現代でいう、統計学である。占考篇に収められている天気予知法、運氣考、占星術等は、現代では天文学という壮大な宇宙学のように、純正哲学部門は最近の物理学、心理学問題とも結びついている。例えば、気象という気は、空気の気ということで物質的であるが、元気の気という心の問題もある。だから、気の問題は、インターデシプリナリーな研究、いわゆる学際的な研究が必要になってくる。

そういう面では、迷信ともいい難く、捨て難いというものである。物と心との関わりを学問とした円了流の素晴らしい洞察力で見ていたと考えられる。物質的なものは理学部門に入り、それを行動という心理学部門になるし、心身の問題は、心と体の面で医学部門になる。宗教学部門、教育学部門とも、それ以外を雑部門とし「物と心」の関係を円了流に考えていった。

円了は迷信⁽¹³⁾といって、全部否定してしまうので良くないという批判も、お化けの専門家の一部の人からいわれているが、今日から見れば幼稚と思われる点も有るが、円了の考えは狭い所を示すのではなく、広い意味で考え

ている。諺と同じである。例えば「爪を火の上で切つてはいけない」というのは、迷信であるが、臭いからという様な教訓的な意味がある。

この事と同じ様に『心理療法』という本を書いていた時は、催眠術が盛んな時期であるが、「催眠術というのはインチキだ」というけれども、「催眠術で病気が治る」となると、その効果を認めなければならないという円了の考えがある。その人と、社会に役に立つものならばよろしいという見方である。

『妖怪学講義』は現代的レベルからみると、受け継いでさらに発展させる部門というできであるが、個々の問題をとり上げると、批判すべき点も随分多い。しかし、円了の同時代的な評価とすると、ヨーロッパの動向と平行したほどの先見、先駆者として拔群の位置付けが可能である。

四 井上円了の学理思想における啓蒙的（社会的）立場

円了は、宗教学部門第四十六節（祈禱、加持、ノリキ）で妖怪学研究の目的と迷信を払う理由を、祈禱を主として医薬を用いることを次にしては正当ではなく、祈禱は治病の一助としなければならないとして次のように著している。

然れども今日にありて医術大に進み、医薬も亦大に改まりたるに際し、尚ほ依然旧来の如く諸病諸患を祈禱によりて治せんとするは迷へるの甚しきものと謂はざるべからず、但し医方によりて治し難き病患少なからず、又治すべきものも精神作用の加はるが為に其効を見ざることあり、此の如き場合には宗教上の信仰によりて治療するを可とす、是れ予が療法に内外の二種ありとなす所以にして、此事は医学部門に於て講述したれば参見

すべし、要するに祈禱呪願は吾人の精神一致して之を行ふに於ては病氣を療治するにも、幾分の効あること又疑ふべからず

と著されている。排斥しなければならない例としては

然れども今日愚民の間に行はるる祈禱の如きは、固より迷信妄想に基けるものなれば、吾人は之を見て実に其愚を笑はざるを得ざるなり、世間に尤も行はろうは狐狸犬神に憑附せられたるとき、祈禱によりて除き払はんとするものはなり……略……

近来我地方に御嶽講といふもの流行し、愚俗の之を信ずる者日に在数を加へ、所在妖術を行ひて人を驚かしむ、就中俗に『ノリキ』と称する一術あり、こは御嶽の神を人のりうつらしむる術にして、其神にのられたる人は能く未来の出来事を予言し、人の運命を予知すと称す、現に当年虎列拉病流行の時の如き、今後幾人の死者あるべしなどと予言せしことあり、又某の病症は某々の草を煎じて服用せしむれば癒ゆべしなどいひて、処方教ふることもありといふ。其他民間に行はるる祈禱呪願については実に抱腹に堪へざるものあり、或新聞に徴兵免れの祈禱と題して左の事を記したれば茲に転載す。……略……

斯の如きは迷信の甚しきものにして、予が排斥せんとするは即ち此種の祈禱を言ふなり、而して予が妖怪学研究の目的も亦、斯かる迷信を払はんとするものに外ならざるなり。
とある。

円了⁽¹⁷⁾の学問は巾広く、自然科学から、人文科学、社会科学等のあらゆる分野の一つの、未知なる不可解なものを妖怪としているが、当時は、科学的な立場を堅持するという事が中心なので、不可知なものは、みんな断ち切つてしまふという、啓蒙主義的な立場が非常にはつきりしている。

(18) 迷信を日常的なものを取り上げられている。例えば心理部門で精神作用、宗教部門での修法、祭祀、鎮魂等々を迷信の一つの形と当時の人々は分らなかったが、円了は、民衆に害を与えるものを迷信として批判して排除していったが、迷信を例外的に認めているのは民衆の啓蒙に役立つものは「生かして」心理効果を世間への効果を狙って言っている。

啓蒙主義者の長所でもあり、短所でもあるが、合理的な説明をして「それは意味がない」と断定してしまうが、今から見ると「いや、そうじゃない、まだそこまでいっていない」という事もあるが、円了は学者としての啓蒙的な立場であるので、「それは意味がない」と断定をしているが、すべてを否定しているばかりではなく、宗教家として心理学者としてスケールの大きな学者としての立場もうかがえる。

五 通仏教からみた井上円了の仏教観及び宗教観

円了は宗教を二派に解釈分類し次の様に述べている。(19) 一つは感情的解釈。一つは神秘的解釈である。感情的解釈は、道理のいかんを問わず、信仰の力によって實際存在するものと断定し、未来世界の存否、靈魂の生滅の問題は、情の上で考え、靈魂は死せずして死後に別世界があるという解釈は、自己の意を慰め、情を満足する為であつて、妄見幻覺も、皆事実と信じて疑うこともない。

感情派の人は経文の一言半語といえども、そのまま解して、裏面にある理を尋ねる事もない。例えば西方極樂世界を説かれている事を見ると、この地球上の西方の極端に至るならば、西方極樂淨土があると考えると同じである。このことは、宗教を信ずるというよりは、経文を信ずるというのである。即ち、經の意を信ずるに非ずし

て、その文字を信ずるものである。だから、禪宗の様に不立文字の宗を立てるのは、宗教者の感情上より文字を偏信する弊を救くおうとして出たものに疑いがない。

間違っていること、害のあることは、捨てなければいけないという科学的な考え方と大乘仏教学者としての態度が明確にされている。

円了とはほぼ同時の仏教学者の思想は大乘非仏説が高まってきている。一八九六（明治二十九）年には、姉崎正治や岸本能武太等のきもいりで比較宗教研究会が開かれた。学問的研究も歴史的文獻研究が盛んになるにつれて、大乘非仏説論が高まった。姉崎正治は『現身仏と法身仏』（一九〇一年刊）の序言に「確実な歴史の中に永遠の真理は見られる」と説き、『根本仏教』（一九一〇年刊）でもパーリ原典をとおしてシヤカの真説を発掘しようとつとめた。真宗、大谷派の村上専精も、他の学者との色あいを少し異にしているが、大乘非仏説を唱えている。円了は文字にとらわれる事なく經文の書いてある裏面の理（真如）を重要視していることを理解する事が出来る。円了の宗教についての考えを要約すると、

感情派の宗教家は、自らの妄見幻覺している物を皆事実としている。幽霊のような物も真に存在するように思ひ、色、形、重量があると信じているが、かつて、神原精二氏は、幽霊というのは見えないものに名づけた言葉であつて、もし見えるならば、顯霊と言つていゝが、私（円了）が言う幽霊は、妄見幻覺である。妄見幻覺は、精神作用より生ずるものであるから、外界に実在すると言ふべきでない。宗教を感情的に解するものは、このような誤りにおちいらぬ様特に注意すべきである。

第二番目の神秘的解釈を挙げるならば、宗教の本境は、皆不可思議の玄林森々たる所に有する。しかし、不可思議な事を深く考えれば、不可思議を呼吸して生存しているともいえる。宗教はこの不可思議を

宗教実⁽²²⁾に此の理を示して、玄のまた玄なる所以を現はす、これ理外の理、言外の言、慮外の慮にして、吾人の智力思想の及ぶ所にあらずと、其の一派には亦奇蹟怪談を信じて、之を以て宗教の真面目となしこれ即ち神の不可思議なる所以なりといひ、或は神通感通を説き、これ宗教の不可思議なりといふ、耶蘇教の經典の如きは実に此の種類の材料を以て充滿されたり、仏教中にても、其一部には神秘怪談を交へ、弘法、日蓮等の諸高僧の伝記を読まば、全部殆んど之を以て充たさるるを見るべし、而して皆以為らく、以て宗教の不可思議を証明すべしと、斯る不思議は、以て唯道理の何たるを知らざる下等人民には感服せしむるの方便とならん、然れども苟くも今日中等以上に位するものは、誰かまたかかる不合理不思議を首肯する者あらん、これ神秘的解釈の下等なるものなり、其他神秘派中高等なる者は、唯だ宗教の理たるや既に玄中の玄、理外の理なれば、吾人の知識と其理との間の海峡に架すべき橋梁なきを以て、吾人は言語道斷、言亡慮絶の点に於て、自然に其理を感受するより外なしとなる。

と著されている。

この様に円了は仏教は我々の人知を超えたもので素晴らしいものであつて、頭の中で考えた心理的な説明だけでは十分ではない。これらのことを円了は、宗教の不可思議は自然にその理を感受する外にないとしている。

円了⁽²³⁾は本質的立場は仏教である。円了の仏教は真理ではなく、真如の立場というのが根底にある。『妖怪学講義』に著わされている個々の問題は、仏教、理学等の各分野を必ず科学的に見て、その時の各現象を妖怪と見る立場をとり、妖怪を真如という立場で全て見た。

ここである真如とは、真如で諸法実相、中道という大乘仏教の真如である。大乘仏教の真如という観点より、個々の現象を批判して「これは間違いだけれども役に立つよ」という事ではないかと考えられる。

円了は、人間には「情感と知力」があり、「知力を和らぐに情感をもつてし、情感を導くに知力をもつてし、知力情感互に相助けて二者の両全を得しむるもの、これわが仏教なり」、「現今開明社会の宗教に適し、将来道理世界の宗教となるべきもの」とし「仏教を改良して国恩の万一に報ぜんことを期する所なり」としている。キリスト教は情感のみで知力に應ずることが出来ないで、わが国でのキリスト教公認に反対の理由でもあった。

円了は『仏教新論』でも「愚俗の信と学者の信とは決して同一にあらざ愚俗の信は所謂妄信にして道理分別なく唯一に信ずるのみなれども学者の信は道理を究め尽して後生ずる所の信なり」と著している。

「愚俗の信」を妖怪迷信とし、迷信打破を目的として多くの書籍より典拠とした『妖怪学講義』等を著したものである。このことについて、『アジア仏教史』⁽²⁵⁾には

『妖怪叢書』の内容の一部は、当時教科書に「迷信退治」として採用されている。明治三十年以降の信仰仏教形成期の仏教清徒の新仏教運動の綱領には、迷信排除を重要な項目の一つとして掲げている。円了の妖怪論はその先駆的役割の果たしたものとみることができる。

と著わされている。『仏教新論』に著されている様に、「愚俗の信」を迷信とし妖怪とし「知力と情感」両者を備えた仏教を「護国愛理」の宗教とし、明治新政府によつて神道国教化政策に対して仏教の復興に果たす役割は非常に大きかったが、修驗道は、キリスト教と同じように「情感」のみで「知力」に應ずることが出来ない宗教と円了にはうつたつたとみることができる。

円了は神仏分離令で明治新政府により消滅させられ「修驗道」にさえ光をあて、⁽²⁶⁾ 既成の思想に偏することなく、「無形の真理」を求めていった。「純正哲学」（形而上学）、を西洋哲学によつて補い「真如」の概念化を試み成功している。円了の思想遍歴が仏教により始まり、仏教に帰し、常に仏教が思想の底流にあったことを重要視し

なければならぬ。

註

- ① J・A・ロニー 吉田禎吾訳 白水社 一九八六年 p 84
- ② 金岡秀友博士還暦記念論文集 『大乘菩薩の世界』 一九八八年 拙稿
- ③ 『アジア仏教史』 日本編 VIII 近代仏教 佼成出版社 p 245
- ④ 『井上円了の教育理念』 新しい建学の精神を求めて 東洋大学 p 11
- ⑤ 理学部門 p 351 第63節
- ⑥ 医学部門 p 150
- ⑦ 医学部門 p 148
- ⑧ 医学部門 p 149
- ⑨ 『妖怪学講義』 純正哲学部門 p 338～340
- ⑩ 昭和61年10月18日 井上円了研究第一部門での研究会での討論速記録 p 49～50
- ⑪ 前掲書 p 16～19
- ⑫ 前掲書 p 22
- ⑬ 前掲書 p 24～25
- ⑭ 前掲書 p 44
- ⑮ 『妖怪学講義』 p 1564～1565
- ⑯ 前掲書 p 1566～1570

- ①⑦ 昭和61年10月18日 井上円了研究第一部門での討論速記録 p 15
- ①⑧ 前掲書 p 29 ~ 50
- ①⑨ 『妖怪学講義』 宗教部門 第三節 (通俗の宗教論)
- ②⑩ 『日本仏教史入門』 田村芳郎著 角川選書 p 192 ~ 193
- ②⑪ 『妖怪学講義』 宗教学部門 p 1333 ~ 1335
- ②⑫ 前掲書 p 1335 ~ 1336
- ②⑬ 昭和61年10月18日 井上円了研究第一部門での討論速記録 p 34 ~ 37
- ②⑭ 『アジア仏教史』 日本編 VIII 近代仏教佼成出版社 p 244
- ②⑮ 前掲書 p 247
- ②⑯ 井上円了総合研究報告 昭和62年12月 東洋大学 清水乞教授 p 4